

2025年11月16日 説教「目をさましていよ」

ルカの福音書 12章 35～40節

前段では、富にしがみつきやすい者たちに対し、イエスは神の国を求めることを教えられました。そして、朽ちることのない宝を天に積むことこそが、大事であることを示されたのです。

1. あかりをともしいなさい (35～36節)

①腰に帯を (35) **「腰に帯を締め、あかりをともしいなさい。」**

イエスの話は新しい展開に進んでいきます。いきなり「腰に帯を締め」とありますが、この表現は終わりの日への備えについて用いられることがあります。また「正義は腰の帯となる」(イザヤ 11:5)とあり、悪魔の策略に対抗するために、「腰には真理の帯を締めよ」(エペソ 6:14)ともあります。正義や真理は人間のうちにはありませんから、キリストにひたすらにすがり、いつも御言葉に導かれることです。私たちが「あかりをとます」という点については、「あなたがたは世の光です」(マタイ 5:14)とありますから、光の主である方からその光をいつもいただくことを心がけるのです。この節は、次に語られることへの心がけです。

②主人が婚礼から帰り(36) **「主人が婚礼から帰って来て戸をたたいたら、すぐに戸をあけようと、その帰りを待ち受けている人たちのようでありなさい。」**

ここに一つのたとえ話がなされます。その設定ですが、ある主人が婚礼があつて外に出ていたというのです。婚礼は遠くであることから、帰って来るのは遅くなったのです。主人は帰ると、家の戸をたたきます。帰って来たことの知らせです。問題はそこからです。主人の帰りを待ち受けて、その知らせを受けた時すぐに対応できるかどうかということです。「おかえりなさい」と戸を開け、迎えなさいというのです。

2. 目をさましている僕の幸い (37～38節)

①目を覚ましている (37) **「帰って来た主人に、『目をさましているところを見られるしもべたちは幸いです。』**

主人の帰りがいつになるのかがわからないので、眠りこけていれば、迎えることはできません。しかし、いつ主人が戻って来ても良いように、目をさましている僕たちは、すぐに対応できます。そして、主人もその僕たちが忠実に仕事を果たしていることを見ることとなります。僕たちからすれば、主人から自分が備えていたことを知ってもらうことができるのです。その僕たちは幸いであるとイエスは言われます。その理由は次の節にあります。

②主人が帯を締め (37) **「まことに、あなたがたに告げます。主人の方で帯を締め、そのしもべたちを食卓に着かせ、そばにいて給仕してください。」**

ここに普通ではないことが起きるというのです。「まことに」とありますが、元の言葉は「アーメン」で、重要なことが伝えられる時に語られます。なんと、帰るのを待ち受けて戸を開けて迎えた僕たちに、その主人自身が帯を締め

て、僕たちを食卓に着かせて、給仕をしてくださるというのです。なにしろ、「しもべ」というのは「ドゥーロス」と言葉で奴隷とも訳せるのです。そのしもべ達に主人が僕のようになってくれるというのですから驚きです。マルコの福音書 10:45 に「人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり」とありますが、イエスはそのような方です。

- ③ 幸いなしもべたち (38) 「**主人が真夜中に帰っても、夜明けに帰っても、いつでもそのようであることを見られるなら、そのしもべたちは幸いです。**」

主人は真夜中に帰ることがあります。また夜明けに帰ることもあります。しかし、どんな時間であっても主人の帰りを迎えることができる僕たちは幸いなのです。その理由は既に述べられましたが、彼らは主人から思ってもみなかった厚遇を受けることになるからなのです。

3. いつも用心せよ (39~40 節)

- ① 泥棒の来る時間 (39) 「**このことを知っておきなさい。もしも家の主人が、どろぼうの来る時間を知っていたなら、おめおめと自分の家に押し入れはしなかったでしょう。**」

イエスは「このことを知っておきなさい」と言われて、もう一つのたとえ話をされます。話の設定は家を管理する主人についてです。泥棒がその家に入ろうとしています。そこでもし主人が、泥棒が入ろうとしている時を知っていたら、家の戸締りなど、様々な面で注意してそれを防ぐでしょう。泥棒はそ入ろうとはしません。泥棒はすきがある家をねらって入り込むのです。

- ② 思いがけない時に (40) 「**あなたがたも用心していなさい。人の子は、思いがけない時に来るのですから。**」

たとえ話に基づき、イエスは言うのです。「あなたがたも用心していなさい。人の子は、思いがけない時に来るのですから。」。人の子とは救い主のことで、イエスご自身のことです。その方が思いがけない時に来るとはどういうことでしょうか。すでに目の前にいらっしゃる方ですから、それを聞いている者たちは戸惑ったかもしれません。後になってみればわかることですが、イエスは十字架にかかって死なれた後によみがえられました。そして、弟子たちのいるところで昇天されました。イエスは今も天にあって、私達を見守ってくださると共に、霊的には私達といつも共にいてくださる主です。その主は、終末の出来事のなかで、再度やって来てくださるというのが聖書の教えです (I テサロニケ 2:19、II テサロニケ 2:1 等参照)。これを再臨と言いますが、それは思いがけない時であるので、用心していなさいと主は言われるのです。

《展開と結論》

今朝の聖書箇所には二つのたとえ話が出てきます。いずれも、主の再臨に関するたとえ話です。しかし、二つのたとえの観点は異なります。そこをみながら、結論をいただいでいきましょう。

第一のたとえ話はある面では喜びをもたらすものです。婚礼から帰った主人を迎えるために、目を覚ましている人たちです。彼らは主人が戻ってきた時に、戸を開けて主人を迎えます。それは、ある面では僕としては当たり前前のことですが、僕であっても眠りこけてしまうことがありますから、当たり前ではありません。それでは、これはどんなことを教えようとしているのでしょうか。マタイの福音書 25 章にはこんなたとえ話がありました。花婿を迎える 10 人の娘がいて、5 人の愚かな娘達は灯は持っていましたが油は用意しておきませんでした。他方、賢い娘達は灯と入れ物に油も持っていました。花婿がなかなか来ないので、皆がうとうとしていました。花婿が夜中になって戻って来た時に、賢い娘達は灯を整えることができましたが、愚かな娘達は油がなく灯を整えることができませんでした。花婿が来るのを待って、目を覚ましているということは、さまざま準備をしていることでもあります。たとえ眠る時間があつたとしても、心がけていれば、すぐにお迎えする準備ができるのです。そして、今朝の聖書箇所にあるように、思いがけず、ご主人の慈愛に触れることができるのです。主人が食事に招き給仕までして下さるというのです。それは、仕える方が「贖いの代価として、自分のいのちを与える」(マルコ 10:45) ことであり、一方的な主の恵みによる救いにあずかり、様々な祝福をいただくことになるのです。

第二のたとえ話は相当に激烈です。なぜなら、泥棒はよく調べ、狙い撃ちしてくるからです。それも不意打ちです。油断がありそうなところを捜して、そこに入り込むのです。そして、大切な物を盗んでいくのです。相手は相当に手強いのです。その気になれば、入り込むことなど簡単と考えている泥棒たちに立ち向かうことになるのです。ちょっとはそつとのことでは、それを防ぐことはできません。しかし、パウロはこのことについて綿密に語ってくれています。「人々が『平和だ。安全だ』と言っているそのようなときに、突如として滅びが襲いかかります。…しかし、あなたがたは暗やみの中にはいないのですから、その日が、盗人のようにあなたがたを襲うことはありません。あなたがたは、光の子ども、昼の子どもだからです」(I テサロニケ 5:1~5)。そしてさらに「信仰と愛を胸当てとして着け、救いの望みをかぶるとしてかぶって慎み深くしていきましょう」「あなたがたは、互いに励まし合い、互いに徳を高め合いなさい。」とも勧めています。

「目をさましていなさい」と教えられていますが、教会の者たちは、声を掛け合い、励まし合っていきましょう。それに、そもそも私達に再臨信仰があるかどうか問われます。信じるなら、再臨の主を待つでしょう。そして、帰って来られた時に戸をあけて迎えます。そうすれば、もったいないことですが、主の恵みによる思いがけない給仕にあずかるのです。信じていきましょう。